研究開発室

「プレイパーク」—みどりの次世代育成空間

北村 安樹子

＜「プレイパーク」という実践＞

近年、「プレイパーク」という取組が注目されている。プレイパークとは「プレイリーダー」と呼ばれる見守り役の大人のもとで、子どもが自由な発想で遊びを創り出し、やりたいことを実現する遊び場である。例えば、火を使ったり、水遊びや泥遊びを思いきり楽しんだり、金づちなどの工具を使って遊具や秘密基地をつくることもできる（いわゆる「公園」をはじめ、近年では、これらの行為を自由にできる場所がほとんどない）。

プレイパークでは、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、子どもがさまざまな遊びを経験するなかで、ケガや危険から身を守る術を身につけることが重視されている。近年では都市公園内やその整備予定地域、あるいは地域の里山等にプレイパークを取り入れて、住民と行政が協働で遊び場や緑地の維持管理を行う事例が増えている。本稿では、首都圏近郊の２つのプレイパークの実践を紹介し、公園や里山といった地域の緑地を次世代育成支援空間として活用していくことの社会的・経済的有用性について考察する。

＜事例1：片倉うさぎ山プレイパーク（神奈川県横浜市）＞

「片倉うさぎ山プレイパーク」は、横浜市内の住宅街にある都市公園内の、雑木林に囲まれた場所で開催されている（図表１）。開設のきっかけは、子どもの遊び場環境に問題意識を抱いた地元の母親たちが93年頃から始めた学習会や外遊びの実践活動である。その後、現在の場所に地区公園が新設されることになり、98年には地域の子ども会や自治会などと「遊び場を考える会」を結成して公園内でのプレイパーク開設を目指すことになった。現在は、自治会関係者や民生委員などを含めた「公園愛護会」、ボランティアの世話人である「あそび場管理運営委員会」といったさまざまな住民組織が、行政や地域住民とともに活動を支えている。08年に市の助成を受けて完成した「うさきちハウス」は、地域のコミュニケーション基地となる場をつくりたいと考えた利用者や関係者が、専門家や市の担当者と議論を重ねながら一部を手作りして設置した小屋で、屋根つきのオープンスペースや事務所などを備えている。

この事例の最大の特徴は、地域周辺のさまざまな子育て支援グループの活動拠点になっている点である。０歳児の母親の交流の場となる子育てカフェ、親子のための各種の自然・文化体験プログラム、地域子育て支援拠点からの育児相談のアウトリーチ活動など、曜日や時間帯によってさまざまな活動が行われている。夕方には小学生や中高生の放課後の居場所になり、高校生が乳幼児とのふれあい体験実習に来たり、課外授業やボランティアの大学生が来ることもある。08年度の利用者はのべ16,436人、ボランティアとして活動にかかわった人々は964人にのぼるが、これ以外にもペットを連れた高齢者やウォーキング中の主婦など、多様な世代が訪れる場となっている。プレイパークの運営費やプレイリーダーの賃金は、市からの助成のほか、個人サポーターによる資金・物品の援助等で賄われている。

（ホームページの掲載は2009年6月）

図表1　片倉うさぎ山プレイパークの概要

■開催日	毎週水、木、土、日の午前10時から午後5時	■立地・空間特性	住宅街に囲まれた都市公園（地区公園） 丘陵・森・湧水など起伏に富む自然地形を活かした空間 周囲を園路が囲み、公園利用者の視覚に入る場所
■発足経緯	1993年　母親らによる「遊びを広げようピッピの会」発足 1998年　新設公園内でのプレイパーク開設を目指し、こども会、自治会などと「遊び場を考える会」結成。 「公園愛護会」の支援を得る。 2001年　公園内にプレイパーク開園。	■行政等の補助	横浜市交付金、神奈川区社会福祉協議会助成金 ヨコハマまち普請事業（うさきちハウス建設） 横浜市プレイパーク支援事業補助金
■利用者数	のべ16,436人（2008年度）	■運営費	年間約255万円（2008年度）
■拠点施設	うさきちハウス、倉庫	■HP	http://www.asahi-net.or.jp/~qb3r-sars/

注：各種資料、関係者ヒアリングに基づき2009年５月現在の状況を記載。写真（左）の中心がうさきちハウス、写真（右）は周囲を囲む園路

＜事例2：四街道プレーパークどんぐりの森（千葉県四街道市）＞

一方、「四街道プレーパークどんぐりの森」は、四街道市の住宅街に隣接する里山で開催されている（図表２）。この事例のきっかけも、プレイパーク活動を知った地元の母親が、環境保全や子育てにかかわる住民グループとともに行った学習活動やワークショップである。ワークショップの参加者は当初20名程度であったが、01年に市の総合運動公園で行ったプレイパークには100名以上が参加し、「四街道にプレーパークをつくる会」が結成された。03年には「千葉県里山条例」が制定され、里山の所有者と里山活動団体の双方が「協定」を締結し知事が認定することによって、双方が安心して里山の整備・活用に取り組める環境が整った。これを受けて同会では地元の里山の地権者に連絡をとり、04年からは保全を条件に現在の里山で活動を始めることになった。プレイパークを開催している場所は、同会が地元の「四街道自然同好会（森の応援団）」のボランティアによる協力を得て、荒廃していた里山の倒木を撤去したり、下草を刈るなどして切り開いた空間である。05年度からは千葉県の次世代育成支援行動計画において、「まっ白い広場（プレーパーク）モデル事業」として活動経費やプレイリーダーの賃金の一部が補助された。県の事業が終了して以降は、四街道市が単独事業として助成を続けている。

この事例の特徴は、プレイパーク活動を始めた母親が、地元の自然同好会の活動にもかかわっており、子育てを経験するなかで、地域の自然環境や生態系の保存に関する問題意識や子どもたちへの環境教育の必要性を感じていたという点にある。母親が幼い子どもを連れて環境保護活動に参加するにはさまざまな点で困難があり、そのこともプレイパーク活動を始めるきっかけの１つとなった。こうした背景もあって、現在このプレイパークでは、自然観察会の開催や稀少植物の保全、森の手入れなどに関して、地元の自然保護団体や里山センターなどから協力や指導を得ている。また、周辺地域の保育園や幼稚園、小中学校などが、プレイパークを自然体験や環境教育の場として団体で活用する機会も多い。

図表2　四街道プレーパーク「どんぐりの森」の概要

■開催日	毎週月、金、土の午前10時から午後5時	■立地・空間特性	住宅街に隣接する里山 開催場所の丘には隣接する公園からトンネル状になった森の階段をくぐって入る 公園、神社(池)、中学校校庭、農村広場等に隣接
■発足経緯	2001年 「四街道にプレーパークをつくる会」発足 2002年 月1回の1日プレーパーク開始（市の総合運動公園、郷土の 森、都市公園の一角など） 2004年 千葉県里山協定に基づき現在地での活動開始	■行政等の補助	千葉県「里山保全整備活用事業」 千葉県「まっ白い広場(プレーパーク)づくりモデル事業」(05～08年度) 四街道市プレーパーク運営事業(09年度～)
■利用者数	のべ7,653人(2008年度)	■HP	http://www.dongurinomori.net/index.html
■拠点施設	倉庫		
■運営費	年間約240万円(2008年度)		

注：各種資料、関係者ヒアリングに基づき2009年５月現在の状況を記載。写真はパーク入口の階段（左）、丘の上にあるパークの様子（下）

＜コミュニティ再生の装置としてのプレイパーク＞

現在、わが国の次世代育成支援対策では、いわゆる保育所だけでなく、地域の多様な子育て支援拠点や小学生の放課後施設、中高生の居場所等の整備が喫緊の課題とされている。本稿でみた２事例は、都市公園や里山といった既存の緑地にプレイパーク活動を取り入れることによって、これらの施設拠点に求められる機能を複合的に生み出し、地域の多様な拠点や人材を有機的に結びつけている。

プレイパークでは、親やプレイリーダーを含めた大人が「危ない」「汚い」「うるさい」を理由に子どもがしようとすることをやみくもに禁止するのではなく、できるだけ見守ることが重視されている。また、プレイパークを持続していくには、運営団体や地域の住民、行政などの関係者が絶え間なく生じるさまざまな課題――運営費などの経済的側面に関する問題、子どものケガや安全管理をめぐる問題、緑地の維持・整備をめぐる問題等に度々向き合わざるを得ない。一律に禁止してしまえば簡単に解決しうることについて、行政や地域のさまざまな立場に立つ大人が、子どもの自由な遊び場を守り、あるいは地域の緑地・自然環境を守るために協議を重ね、互いが譲歩する作業が必要になる。つまり、プレイパークは子どもの遊び場であるようにみえて、実のところ、子どもの自由な育ちを見守る大人や、緑地を大切にしてきた人々の思いを理解する親子を、地域に育て、増やしていく「装置」ともいえる。

経済的側面からみた場合にも、プレイパークは興味深い。四街道市の場合、08年度の利用者数はのべ7,653人、３年前に比べて２倍以上の伸びを示す。市職員によれば、最近ではプレイパークの存在を理由に市内への転入を決めた若い家族や、利用者がプレイパークを通じて他の子育て支援拠点等を知る例もみられるという。コミュニティ崩壊と次世代育成が社会的課題となるなかで、地域の緑地を次世代育成空間として活用していくことは、地域の持続可能性や経済的付加価値を高めるだけでなく、地域に眠る未利用・低利用の資源（土地・施設）や人材を活かすという点でも、有効な戦略になるのではないか。